

お薬手帳万一のお守り

「お薬手帳はお持ちですか」。薬局で、そんな言葉を耳にしたことはありませんか。医師が処方した薬の名称や効能などを記録したもので、いわば自分が服用している「薬歴」のこと。薬の重複や副作用などがチェックでき、患者に勧める薬局が県内でも増えていきます。現状を取材してみました。(成沢解語)

伸びぬ携帯意識改革課題

お薬手帳 処方薬の名称や効能などを記録する冊子で、薬局や病院で無料で配布している。全国一律の規格はないが、薬剤師が発行する手帳には薬局側が記録する薬や検査値、注意点などが、患者側には副作用やアレルギーなどの記入欄がある。00年から、手帳を記入すると、薬局側が健康保険法に基づく診療報酬を請求できるようになり、利用を促す動きが本格化。昨年4月には、病院内の薬局でも診療報酬を請求する要件が加わり普及を後押しした。

周南市の70代女性は、薬局の勧めで数年前からお薬手帳を持つようになった。脳梗塞、心筋梗塞、糖尿病、ぜんそくを患い、処方薬を複数飲んでいる。手帳には「バイアスピリン」「パナルジン」と印字したシールが張ってあった。いずれも心筋梗塞の薬で、血を固まりにくくする効果がある。

かかる場合もあったという。過去の薬による事故も教訓だ。93年には、带状疱疹の薬のソリブジンと抗がん剤との併用して15人が死亡した薬害が発生。これらの薬の相互作用は知られていなかったが、医師が抗がん剤の服用に気づかなかったのが原因だった。

だが、こうした薬を服用していると、手術の際に傷口から血が止まらなくなる恐れがある。女性は以前、出血を伴う歯の治療を受けた際、歯科医から薬の服用の有無を聞かれなかったという。この時はいずれの薬も服用していなかった。

お薬手帳を示すことで、初めて診察してもらう医師にも、服用している薬が分かると、飲み合わせの悪い薬や重複する作用のある薬を処方しないよう防げることができる。

だが一方で、入院患者の所持は初回の調査で16%だったが、その後は向上がなかった。手帳配布後に再入院した患者の持参も23%にとどまり、退院後には活用されていない実態が明らかになった。

最近では、お薬手帳の持参を呼びかけている病院が多い。女性が入院している徳山医師会病院(周南市慶万町)も1年半ほど前から、患者に手帳の持参を促す取り組みを始めた。病院が手帳の持参状況を1カ月間調べたところ、当初は外来患者の94%が持参せず、入院患者では69%が持参していないと回答。持参した人、家にあると回答した人はいずれも11%だった。

お薬手帳の持参を呼びかけている病院が多い。女性が入院している徳山医師会病院(周南市慶万町)も1年半ほど前から、患者に手帳の持参を促す取り組みを始めた。病院が手帳の持参状況を1カ月間調べたところ、当初は外来患者の94%が持参せず、入院患者では69%が持参していないと回答。持参した人、家にあると回答した人はいずれも11%だった。

持参しない理由は「面倒くさい」が37%と最多で、次は「忘れる」が26%、さらに「聞いてない」の15%と続いた。しかし、例えば大災害があった時、自分が服用している薬が散逸してしまったり、どうなるのか。95年の阪神・淡路大震災。現地には多くの医師が入ったが、高齢者が服用している薬が何なのか分からないケースが続出。徳山医師会病院の薬剤師も現地入りしたが、薬の特定に時間が

くらしを見つめて

医療・福祉

投薬の重複や副作用事故を防止



お薬手帳の持参を呼びかける文書を受付で掲げていた。周南市慶万町